

病院に勤務する看護スタッフのスピーチロックの実態—排泄ケアに視点を当てて—

内田優美 高橋智美
新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科

【背景・目的】 身体拘束は人権の侵害にあたる。しかし医療の現場では侵襲的な治療や薬剤を使用すること、疾患や症状により安静臥床の必要性があること、ノンコンプライアンスな患者状況から安全性の確保のために最小限の抑制が行われることがある。そのため、日本看護協会は身体拘束を患者の安全の確保のために「切迫性・非代替性・一時性」の3要素を満たし、きわめて慎重に必要最低限の範囲で行われると示している。身体拘束にはフィジカルロック・ドラッグロック・スピーチロックの3ロックがある。このうちスピーチロックは言葉により相手の行動を抑制、制限することであり目に見えるものではない。そのため看護者が認識していなければ、目に見えない拘束が行われていることもあり得る。先行研究では介護老人保健施設のスピーチロック実態が明らかにされている。しかし病院でのスピーチロックに関する研究は極めて少ない。本研究の目的は、病棟における看護師のスピーチロックの認識と、排泄ケア中のスピーチロックの実態を明らかにし、スピーチロックの廃止に活かすことである。

【方法】 本研究では、自記式質問紙法に基づく調査を実施する。質問紙に記述された回答の文脈を考慮してスピーチロック内容を切片化、類型化し、その数で記述、推測統計を実施する。データは整理番号制とし番号個人が特定されないようにした。本学倫理審査を受審し承認(18232-190705)を得た。尚、本研究における利益相反はない。

【結果】 アンケートの回収率は47%、有効回答率は96%であった。

1. 研究参加者の属性

回答者の平均勤務年数は15.3年であった(表1)。

表1 研究参加者の勤務年数

勤務年数	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26以上
人数	5	7	6	4	4	5

2. スピーチロックの認知度

知っている・少し知っていると合わせて3割強であった(図1)。

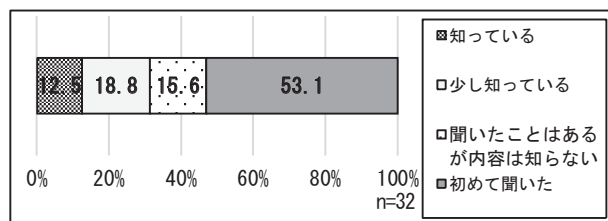


図1 病院におけるスピーチロックの認知度

3. 排泄場面におけるスピーチロック

一番多く使用されていたスピーチロックは「トイレはオムツでしてください」であった。「トイレはオムツでしてください」と「もう出なさそうなのでベッドに戻りましょう」「まだですか」「まだ出ますか」「重い」「後で替えます」では $p < 0.05$ の有意差があった(図2)。

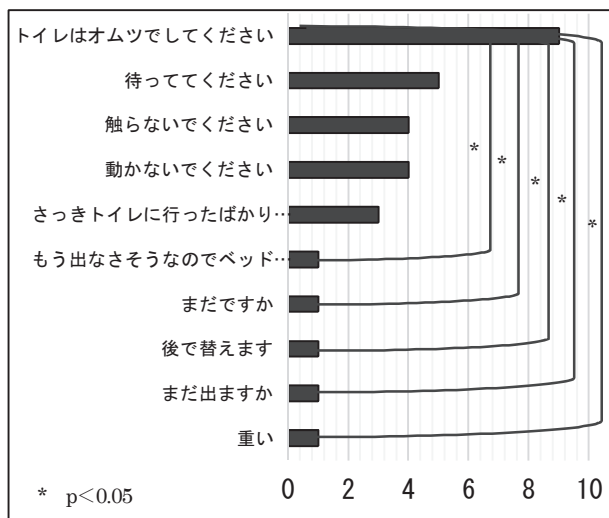


図2 排泄援助場面でのスピーチロック数

4. スピーチロックを使用する状況やその時の気持ち

「転倒や転落のことを考えるととっさに言葉が出てしまう」「忙しくて手が回らない」「多忙な業務の中、患者の安全を守る為には必要なかもしれないが倫理的には悩む」「リスクもあるがNs業務を優先させてしまっている」等の意見があった。

【考察】 スピーチロックを初めて聞いた看護師は5割強であり、半数以上が無意識にスピーチロックを行っていることが推察された。排泄援助場面のスピーチロックには「動かないでください」「触らないでください」「待ってください」のような行動を制限する言葉の使用が多い。これは排泄援助を行う際に不潔、汚染範囲を広げないようにするためや安全確保のために患者の行動を制限していると考えられる。「トイレはオムツでしてください」という言葉は、患者にとって自尊心の傷つけられる言葉であると考えられる。そのためどのような状況でオムツ内に排泄しなければならぬのかを説明した上で使用するべきだと考える。スピーチロックを使用しているときの気持ちに関する記述の背景には、人手不足、多忙、気持ちの焦りがあると推察する。そのため看護師は患者の尊厳遵守を基本にケアを行うが、患者の行動制限を要さざるを得ない場合もあると考えられた。また患者の行動を制限しているという意識の前に、患者の安全の確保や汚染が広がらないように瞬間的にスピーチロックが使用されていることも推察された。

【結論】 看護師の半数はスピーチロックを認識していなかった。また「トイレはオムツでしてください」という言葉が最も多く使用されていた。患者の安全確保の為に使用されていたことが考えられた。